



弱音を吐いていい



最近、障害者職業生活相談員として先生方の相談活動をしていて感じる場合があります。仕事がうまくいかなくて療養休暇になる前に、自分の心の重荷を軽くすることができたら療養休暇に入らなくても済んだのではないかと。

我々はスーパーマンではありません。誰も、うまくいかないこと、悩む場合があります。それを一人で抱え込んで解決できる人は多くありません。

教職員という仕事をする方はまじめな方が多いです。何もかも自分で処理しようと努力します。しかし、心と体はうそをつきません。身体症状に現れます。

弱音を吐いてみませんか。話を聞いてもらうだけで気持ちが楽になります。一緒に解決策を考える人が近くにいれば安心できます。安心できれば仕事に対するアプローチも変わります。

人は、自分の特質をばくぜんとして理解していますが、生きていくにしたがって、特質（考え方の特徴、得意なこと不得意なこと等）がはっきりしてくることがあります。考え方の特徴（特にまじめすぎる考え方）や不得意なことに惑わされていませんか。不得意なことを直そうとエネルギーを使いすぎていませんか。得意なことを自分の強みとし、それにエネルギーを使うとうまくいくことが多くあります。

学校では校長先生、教頭先生方が話を聞いてくれることがあります。しかし、立場があるのになかなか立ち入った相談活動はできないときもあります。その時は県教育委員会（教育庁総務企画部総務課 福利厚生室 教職員相談室 029-301-5438）や公立学校共済組合が実施する相談事業（公立学校共済組合の健康相談事業 0120-783-269）、または水戸教育事務所の障害者職業生活相談員（029-227-4451）を活用してください。（障害者職業生活相談員 今川 宗男）

春夏冬話（あきない話）コーナー 「ひと夏の経験」



食欲の秋（U・Y作）

さだまさしさんの「案山子（かかし）」という曲を、ご存じですか。

～元気でいるか 街には慣れたか 友達できたか
寂しくないか お金はあるか 今度いつ帰る～

今から45年ほど前、昭和52年11月に発表された、さださんの代表曲の一つです。

この曲を、私は、「故郷を離れて都会で暮らす息子を案ずる、父親の思いを綴った歌」だと、発表当時から最近まで、ずーっと思っていました。そして、極めて繊細で心配性で、もはやお節介とも言うべき、この父親の思いに違和感、もっと言えば、嫌悪感さえ感じていました。父親とは、そうじゃないだろう。威厳や頑固さ、ある種の距離感をさえ持って、我が子に接すべき存在であって、例えどんなに寂しくても、辛くても、その思いは決して、他言してはならない。「秘めて放たじ」なのだ。もし自分の父親がこんな風だったら、それは厄介だなあ、気色悪いなあ、感じていたのです。「こんな父親って、居る？」と、ずーっと思っていました。

ところが・・・です。

この夏、この原稿を書くために、あれこれ検索していたら、この曲は、「故郷を離れて都会で暮らす弟を案ずる、兄の思いを綴った歌」だと、解説されていたのであります。「父ではなく、兄ですって？」「そんな馬鹿な！みんな知ってた？」

私のこの曲に対する積年の違和感や嫌悪感は、もろくも崩れ去ったのであります。

それでも、私は、負け惜しみだとわかっているけど、言いたい。「こんな兄貴って、居る？」

(by S・S)